

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

- | | | |
|----|-----------------|--------|
| 1. | 外国語学部・総合国際学研究科 | 研究 1-1 |
| 2. | アジア・アフリカ言語文化研究所 | 研究 2-1 |

外国語学部・総合国際学研究科

- I 研究水準 研究 1-2
- II 質の向上度 研究 1-3

※「総合国際学研究科」は、平成 21 年度に「地域文化研究科」より改組された。

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、21 世紀 COE プログラムの採択を得て国際的な水準における教育研究拠点を形成し、さらに、研究会、国際会議、国際シンポジウムを開催するなど、積極的に研究を推進している。研究資金の獲得状況については、競争的資金の獲得に努めており、科学研究費補助金の採択率は、おおよそ全国 5 位以内に位置し、年間獲得金額も着実に増加している。さらに、受託研究費、寄附金等の競争的資金の獲得に向けて積極的に取組、研究を推進していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、外国語学部・地域文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、外国語学部・地域文化研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における外国語学部・総合国際学研究所の判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、日本を含む世界の 26 言語を中心に、言語・文化、地域社会及び国際関係に関する諸研究を推進する中で、研究成果が数多く生まれている。また、哲学、文学の分野において、例えば、月刊誌『国文学』連載「境界の侵犯から」を中心に、書き下ろしの翻訳論を加えまとめた比較文学論集等で、卓越した研究成果

を上げている。社会、経済、文化面では、文学の分野でロシア文学の革新的な翻訳を出版するなど卓越した研究成果を上げている。過去4年間の研究成果が、「毎日出版文化賞（毎日新聞社）特別賞（翻訳）」、「日本翻訳文化出版賞」、「『イタリア連帯の星』勲章コンメンダトーレ賞」並びに大韓民国やインド政府からの賞を受賞したことなどは、優れた成果である。

以上の点について、外国語学部・地域文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、外国語学部・地域文化研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における外国語学部・総合国際学研究所の判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が3件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。

アジア・アフリカ言語文化研究所

I	研究水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、各共同プロジェクトに国内外から多くの研究者が共同研究員として参加しており、また、法人化後に開設された海外拠点を軸にして、様々の国際研究集会や国際的な共同研究に取り組むなど、アジア・アフリカ世界を対象とする特筆すべき活発な研究活動を展開している。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の獲得件数、受託研究・受託事業件数共に、在籍所員数に比較して極めて高い数値を示しており、活発な研究活動がなされていることは、優れた成果であることから、期待される水準を上回ると判断される。

「共同利用・共同研究の実施状況」のうち、当該研究所の研究対象とするアジア・アフリカ世界の言語文化の様々な側面をバランスよく探求する 20 件を超える共同研究プロジェクトが動いており、これは研究所の規模を考えると驚異的な数字である。しかも、いずれのプロジェクトも共同研究員の積極的な参加が見られ、共同利用・共同研究が円滑かつ活発に行われていることは、優れた成果であることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、アジア・アフリカ言語文化研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、アジア・アフリカ言語文化研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、言語文化研究所の対象領域全般にわたって優れた研究成果が数多く生まれており、特に、『選史』の校訂出版やイスラーム世界と西欧の文化交流史に新たな視点を加える旅行記の校訂・解説、さらにはイラン史研究の分野で卓越した研究成果が発表されている。社会、経済、文化面では、東洋史や文化人類学・民族学等の分野で優れた研究成果が生まれている。こうした成果には、英語をはじめとする外国語で発表されたものも少なくないことから、国内の学術賞や海外の学術賞を受賞し、さらには海外で書評対象になるなど、当該研究所の国際的な発信力を高める研究成果が生まれていることは、特筆に価する優れた成果である。

以上の点について、アジア・アフリカ言語文化研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、アジア・アフリカ言語文化研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。